

第四三五回 青葉会 令和四年七月二十八日(木) (於：赤坂飯店竹橋店 個室)

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ

長谷見びん 星田啓子

投句・選句 伊賀山そらお 後藤とみ子 小早健介 朱牟田恵洲 高橋康敏 土谷堂哉

中川雅夫 西澤國護 福島正明 古田昇 宮内規雄 山崎亜也

山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 山本三恵

投句のみ 豊田ゆたか

《互選句》○は選者の特選 ○は孤舟選者の選

九点 遠くより合図の日傘廻さるる 孤舟 (忠・○千・恵・康・○堂・正・昇・け・天)

振り分け荷銀座に下ろす風鈴屋 とみ子 (紀・千・○恵・堂・允・正・け・天・○盛)

八点 青芝の無名の墓碑や「兵」一字 びん (紀・忠・健・恵・康・堂・け・天)

七点 ◎遠くから祭囃子の里帰り 忠彦 (紀・孤・そ・た・清・國・允)

捕虫網高く掲げて凱旋す 孤舟 (そ・と・堂・○健・清・允・○昇)

◎籠り居て読むは清張戻り梅雨 健介 (紀・孤・千・龍・康・昇・亜)

野暮用と云ひつパナマで家を出る 亜也 (紀・恵・○孝・○龍・清・敏・盛)

六点 ◎汗拭かず曲尺(かねじやく)使ふ官大工 紀久男 (孤・五・正・啓・亜・天)

ラジオ聴きドイツ語学ぶ樹下涼し 全 (健・龍・敏・正・け・盛)

襟足に若さの薫る藍浴衣 孤舟 (紀・た・敏・康・○允・盛)

雲一朵遊ばす山の滴れり 全 (紀・五・孝・清・規・○三)

青田風駅に古墳の案内図 康敏 (紀・そ・と・び・昇・三)

五点 ◎雲海を五彩に染めて日が昇る 昇 (紀・○そ・孤・た・び)

◎月下美人アイラブユーと訳す人 啓子 (紀・孤・健・亜・三)

四点 大雨の音の合間に蟬の声 そらお (千・隆・規・雅)

蓮二輪小さき池を整へり 忠彦 (紀・た・清・敏)

横須賀

◎艦名はすべて平仮名土用波 五郎太 (紀・孤・康・盛)

探し物に暮るる一日や梅雨深し 恵洲 (紀・五・啓・三)

くちなしの花ひそやかに木間陰 ゆたか (そ・敏・雅・規)

◎アマンドの角に人待つサングラス 康敏 (紀・孤・○正・啓)

皆老いて墓参取り止め仏壇で 國護 (紀・敏・び・隆)

炎帝とともに寝そべり波を聞く 五郎太 (健・千・け・三)

やもり棲む廊下きませせ川の湯へ びん (紀・○と・恵・亜)

緑陰や奥に庵主の住居跡 正明 (紀・健・恵・○康)

ががんぼの狼藉ぶりや島の宿  
啓子 昇 (紀・び・啓・規)  
惑ふ夜仏間に強く百合薫る (紀・孝・龍・三)  
◎ひとときは都人なり貴船川床 盛雄 (紀・孤・た・堂)

三点

◎また一人病の知らせ梅雨長し そらお (紀・孤・規)  
寄る辺無く哀しき凶行戻梅雨 忠彦 (紀・隆・啓)  
梶の葉の蓋を畳みて人おもふ 五郎太 (紀・忠・孝)  
母のピアノ聞こゆるあたり昼寝の子 とみ子 (紀・啓・盛)  
◎網戸より何を訴ふ油蟬 健介 (孤・清・規)

当世流小栗判官

汗だくの馬脚の芸にやんやなり 千恵 (紀・と・雅)  
驟雨来ぬ過ぎればすつきり夕間暮 ただしげ (紀・敏・雅)  
骨切りの音心地よく鱧を喰う 全 (紀・千・天)

紀伊国屋を偲びて

江戸和事田之助去りて五月闇 全 (紀・と・亜)  
天を衝く長刀鉾や疫病断つ 全 (と・昇・け)  
8の字に戸惑ふ二人茅の輪かな 堂哉 (紀・五・昇)  
旅立ちの支度楽しき夏の朝 ゆたか (そ・た・允)  
手火花が探す昔の裏通り 正明 (紀・忠・國)  
著莪咲くを愛づる人逝き今日一年 啓子 (紀・孝・敏)  
七月やあの日あの時婚約す 規雄 (紀・龍・敏)  
雲の峰辻の地蔵はすまし顔 けい子 (紀・五・天)  
眼力も萎えて目を閉ず猛暑かな 天牛 (紀・敏・亜)  
怪しげな夢は中折れ昼寝覚 盛雄 (紀・龍・允)

二点

改正を避け得ぬものか蟬の声 五郎太 (紀・隆)  
打撃一閃その先は夏の雲 千恵 (紀・忠)  
願ひたし悪疫退散祇園会に 全 (正・雅)  
家族の数確かめ枇杷を挽ぎ呉るる 恵洲 (紀・堂)  
のうぜんや黒き引戸の鍼灸院 康敏 (紀・び)

大阪松竹座

勘九郎の粋な宙乗り夕立晴 堂哉 (紀・雅)  
髪結いて七夕迎う妻若し 雅夫 (紀・敏)  
茗荷の子共生嬉し庭の隅 全 (紀・び)  
早朝に涼を求めて夫婦連れ 國護 (紀・隆)  
猛暑期にファインデイとは曇り空 全 (紀・敏)  
西表島陸生螢

同調す千と数へる螢の灯 啓子 (紀・敏)  
核知らぬ少年の夏雲流る 盛雄 (紀・隆)

一点

釉薬メーカー社長の傘寿祝 (名古屋) 紀久男 (け)  
豪盛に散財尽す夏宴

麦笛で呼べば口笛にて応ふ	孤舟	(紀)
回重ねなほ先見えず大暑かな	五郎太	(孝)
梅雨明けの斯くもの早さ病む地球	千恵	(忠)
うすもの着て美貌のメゾを聞きに行く	全	(紀)
炎昼を歩めば上下で挟み撃ち	ただしげ	(紀)
樺(かんば) 焚き足元照らすご先祖の	國護	(紀)
夏合宿死ぬ気で走れまだ夢に	全	(紀)
奥吉野雷雲を待つ大河あり	びん	(紀)
山百合や季節切手に登場す	啓子	(紀)
雨蛙水神様に仕る	規雄	(紀)
知らずして土用に蜷食しけり	亜也	(五)
朝の海今日は良き日か虹二重	けい子	(紀)
ああ失敬水打つ先に人の影	天牛	(紀)

※ ※ ※ ※ ※

## 【句評】

九点句

遠くより合図の日傘廻さるる

孤舟

千恵さん・・・素敵な中年紳士が恋人と待ち合わせしているといった映画の1シーンを連想させますね。私も日傘廻してみたい・・・。

恵洲さん・・・老いらくの恋の逢引の景か？と想像力を掻き立てられます。くるくると日傘を回して、私はここよ、と合図を送ってくれる、いいですねー。  
康敏さん・・・下五「廻さるる」の助動詞「る」は尊敬の意味に解しました。炎天下の奥様同士の待ち合わせですね。

堂哉さん・・・懐かしい映画のワンシーン。プレゼントにもらった傘を満面の笑顔で、目立たぬように。ランチは何処かな？

天牛さん・・・女性同士でしょうね。そんなに若い人ではないでしょう。

振り分け荷銀座に下ろす風鈴屋

とみ子

千恵さん・・・日本一贅沢でおしゃれな街銀座は一方で古き良きものとの相性もぴったりでです。この対比が素敵です。

恵洲さん・・・今時の銀座でこんな風景が見られるのだとしたら嬉しいですね。歩行者天国の時でしょうか？一陣の涼風に吹かれる心地がします。とてもいい風情なので、今月の特選にさせていただきました。

堂哉さん・・・今も居るのですか？昭和の思い出ですか？水を飲むおじさん、気まぐれに鳴る涼しげな音。

天牛さん・・・今どきこんなありますかね、会ってみたいです。

盛雄さん・・・映画の撮影現場を彷彿させる、愉しい一句。

八点句

青芝の無名の墓碑や「兵」一字

びん

恵洲さん・・・広い霊園の隅にある無名兵士の墓。「兵」一字だけ彫られている質素な墓碑、敗戦忌のある八月に相応しい句。

康敏さん・・・良い句ですが、二句一章にするなら、季語の後に切れ字「や」を用いるべきと思います。【青芝や無名の墓碑に兵一字】で季語が生きて来ます。

堂哉さん・・・大阪天王寺に広大な陸軍墓地があり、多分一兵卒の小さな墓がズラリあります。

天牛さん・・・昔も今も犠牲になるのは兵卒です。

## 七点句 遠くから祭囃子の里帰り

忠彦

孤舟さん・・・久し振りの帰省で実家の大広間で昼寝。懐かしい祭りばやしの音色が流れてくる。

ただしげさん・・・暫く中止していた夏祭りが行われ、その高揚感が理解できる。

## 捕虫網高く掲げて凱旋す

孤舟

健介さん・・・虫取りは大漁か？いや捕れなかったか？それはともかく、網を高く掲げた勇姿が微笑ましいです。

堂哉さん・・・さぞかし籠は宝物でいっぱい、子供の得意気な顔と大声が。下五がびたり。

昇さん・・・小学3年生の孫がキャンプで蟬を籠一杯捕ってきた写真が届いた。

孫のドヤ顔に息子や私の幼い頃の同じ光景がフラッシュバックした。

血は争えぬもの。凱旋の措辞が高揚感をピタリと決めた。

## 籠り居て読むは清張戻り梅雨

健介

孤舟さん・・・外は雷を伴った大雨。こんな時、清張の長編推理小説が一服の清涼剤となる。

龍平さん・・・夏目漱石「こころ」朗読を聞く。七時間余りの朗読が七日掛かった。

感想…金や女性に対する行動は《イザとなると》今も昔も変わらない。

康敏さん・・・猛暑の後の鬱陶しい戻り梅雨、清張の作品を読むのに適した雰囲気です。清張作品は繰り返し返しドラマ化されてますが、今年になっても

「目の壁」や「混声の森」など数作品がドラマ化され、放映されていきます。

亜也さん・・・いかにもという取合わせ。

## 野暮用と云ひつパナマで家を出る 亜也

恵洲さん・・・これも老いらくの恋かの逢引に出かける図？それも奥方には「ちよつと野暮用ででてくる」などと言いつつ…。それにしてもパナマ帽とは旧式だなあ。

龍平さん・・・小雨降るパリの夕暮れ。Miyake Isseyの小さなシャレた看板がいくつも架かった小径を用も無いのにぶらぶら歩いた記憶・・・何に懂れた？

孝岳さん・・・パナマ帽を被り（多分籐のステッキを携えて）行き先も告げず、心軽やかに散歩に出かける洒脱な雰囲気が好きです。「野暮用」が効いていますね。

盛雄さん・・・歳を取ってもダンディさは変わらずパナマ帽が良くお似合いです。

※康敏さん・・・「云ひつ」は「云ひつ」、つまり「云ひながら」の意味で使っておられると思いますが、よくある間違いかと。完了の助動詞「つ」に、

接続助詞「つつ」の意味はありませんので、  
【野暮用と云ひてパナマで家を出る】としたら如何でしょうか。

#### 六点句

汗拭かず曲尺（かねじやく）使ふ宮大工 紀久男

孤舟さん・・・昔気質で仕事が丁寧で実直な宮大工。

天牛さん・・・曲尺を知っている人はだんだん少なくなってきました。

ラジオ聴きドイツ語学ぶ樹下涼し

紀久男

けい子さん・・・主人も毎朝英語とドイツ語講座聞いています。なんの役に立つか、と笑う妻です。

盛雄さん・・・老いてなほ向上心見せる作者に敬意。

襟足に若さの薫る藍浴衣

孤舟

ただしげさん・・・襟足の白さと藍染の対比と清楚な感じの色気が美しい。

康敏さん・・・浴衣姿の若い女性が目に浮かびます。一読して景が浮かぶのは良い俳句の証拠です。

允章さん・・・髪を纏めて白い襟足を見せる若い女性の浴衣姿。

盛雄さん・・・行き交う人（男性）が振り返る？この句は藍浴衣で締められました。佳句です。

雲一朵遊ばす山の滴れり

孤舟

五郎太さん・・・山を主語に、そこにかかる一片の雲を遊ばすと読まれたことに感心しました。下五は「滴れり」か「滴れる」か？

青田風駅に古墳の案内図

康敏

とみ子さん・・・青田風と古墳の取り合わせが、良かったです。

#### 五点句

雲海を五彩に染めて日が昇る

昇

孤舟さん・・・過ぎし日の富士山頂からの雲海がいまだに目に焼き付いている。

ただしげさん・・・雲海の中から昇る朝日、その美しさが目に浮かぶようだ。

月下美人アイラブユーと訳す人

啓子

孤舟さん・・・月下美人の花言葉は「つややかな美人」「はかない恋」など。「アイラブユー」も花言葉に加えて欲しい。

亜也さん・・・松田樹里亜の曲の歌詞には出てきて、門あさ美のには出てこない…。

#### 四点句

大雨の音の合間に蟬の声

そらお

隆さん・・・「雨の音」と「蟬の声」。自然と自然のぶつかり合いは、地球の生命力。

蓮二輪小さき池を整へり

忠彦

ただしげさん・・・小さい池に蓮の花が二輪、その感じを下五で上手く表現している。※康敏さん・・・良い句と思われませんが、下五の「整へり」に疑問があります。

「整へ」は他動詞下二段の連用形で、完了の助動詞「り」には接続しません。「り」と接続するのは四段の命令形とサ変の未然形だけです  
ので【蓮二輪小さき池を整ふる】とすると良いかと思えます。

#### 横須賀

艦名はすべて平仮名土用波

五郎太

孤舟さん・・・確かに海上自衛隊の艦船名は、且つての「大和」「武蔵」から

「もがみ」「くまの」などの平仮名表記に替わった。

康敏さん……面白いところに着眼されました。海上自衛隊の艦名はすべて平仮名です。旧海軍では艦名は「三笠」「武蔵」と漢字でしたが、船体の表示は平仮名でした。一方、句として、船舶に「土用波」は付き過ぎかとも思いますので「雲の峰」とか「夏の雲」にしたら如何でしょう。

紀久男……大阪時代、西宮市の市民見学会で「沢の鶴」を見学してから裏の波止場から兵学校出の先輩に連れられランチに乗りますと、自衛隊の楽隊の派手な軍艦マーチに送られ吃驚しました。その後、ひえい（旧海軍の護衛艦）艦上で栄誉礼を受けて面映ゆい思いをしたことがあります。

アマンドの角に人待つサンングラス 康敏

孤舟さん……時代の最先端を行く恋人同士のデートの待ち合わせ。

正明さん……アマンドは青春の溜まり場でした。懐かしさで選びました。

啓子さん……その昔、六本木のランドマークとも云えたアマンド。眼差しを隠すほど濃いサンングラス。「すかしてるうー」と云う言葉と共に、セピア色になった写真を見るようです。

皆老いて墓参り止め仏壇で 國護

隆さん……遺骨を納めた墓に、位牌を納めた仏壇に拜む。日本人は忙しい。

火葬と共に栄えたお墓。高額な負担をかける時代も変わりつつある。

【年取るや墓参できずに仏壇に】でも。

やもり棲む廊下きませ川の湯へ びん

とみ子さん……宿と共にやもりも代を襲っている事でしょう。

恵洲さん……既視感を感じさせる一句、川のせせらぎが聞こえる鄙びた温泉宿の佇まい。

亜也さん……ハノイのホテルの湖に面した廊下の天井にひっそりとしたのを思い出しました。

緑陰や奥に庵主の住居跡 正明

恵洲さん……寂聴尼の庵あとでしょうか？亡くなった庵主を偲ぶ気持ちの感じられる一句。「ひっそり感」が涼を呼ぶ。

康敏さん……緑濃い中に庵主の住居跡を示す石碑、景が見えて来ます。由比ヶ浜の虚子庵跡でしょうか

ががんぼの狼藉ぶりや島の宿 昇

啓子さん……これはバリ島あたりの宿でしょうか。部屋に入って電気が点くと大きなががんぼが飛び回ります。ががんぼの狼藉は客の狼狽を招くものでもありますね。どこか面白い、そのままの雰囲気伝わります。

◎ひとときは都人なり貴船川床 盛雄

孤舟さん……昼は青葉に、夜は螢火に涼を求め、清流に耳を傾けつつ戴く夏料理。しばし貴人になったような気分だ。

ただしげさん……貴船の川床での食事、その嬉しさをひと時の都人と表現して面白い。堂哉さん……鴨川の川床とは一味違う風情がありますね。来年は皆さんと楽しめるかな？

紀久男……大阪時代、川島織物と取引（売込み）しておりましたので、何度も貴船の料亭を利用しました。雪の積もった料亭で祇園の老妓を呼び

散財したことなど思い出します。

### 三点句

また一人病の知らせ梅雨長し

そらお

孤舟さん・・・コロナの陽性者が増え続け、梅雨の鬱陶しさに拍車がかかる。寄る辺無く哀しき凶行戻梅雨

忠彦

隆さん・・・安倍元首相凶弾に倒るのニュースは震撼させた。普通の人が殺人犯に変わる瞬間を止められないか。皮肉にも政治家の仕事である。

啓子さん・・・一見してその裏にある事情まで見えるよう。胸が詰まります。

改正を避け得ぬものか蟬の声

五郎太

隆さん・・・憲法「改正」のことか。憲法「改正」と言えど、限界がある。

「戦争ができる普通の国」を目指せば、「改正」を越えて憲法の「廃棄」を行なったことになる。国民の目が鋭くならなければならない。国会にも「蟬の声」が欲しい。

母のピアノ聞こゆるあたり昼寝の子 とみ子

盛雄さん・・・平和な一家の昼下がり詠んだ作品。ピアノの腕前が確かなのでし

う。「地」

網戸より何を訴ふ油蟬

健介

孤舟さん・・・網戸にしがみついている蟬は、己が儂い命を嘆いているのだろう。

※康敏さん・・・季重なり、「網戸」も「油蟬」も夏の季語です。それに「何を訴ふ」と

読者に考えさせても無駄でしょう、作者が分からないのですから。

当世流小栗判官

汗だくの馬脚の芸にやんやなり

千恵

とみ子さん・・・本当に大きな拍手が起きましたね。

骨切りの音心地よく鱧を喰う

ただしげ

天牛さん・・・関西の人でない実感をとまはないでしょうね。

紀伊国屋を偲びて

江戸和事田之助去りて五月闇

ただしげ

とみ子さん・・・江戸和事という言葉知りませんでした。田之助さんで納得しました。

亜也さん・・・江戸和事という藝があったことを喪失感とともに再認識。

紀久男・・・先代の田之助や宗十郎は江戸和事、屋号の紀伊国屋にぴったりでした。大向うのひとりとして、紀伊国屋の屋号復活が待たれます。

8の字に戸惑ふ二人茅の輪かな

堂哉

五郎太さん・・・8の字を書くように茅の輪ををくぐると教えられましたが、多くの人はよく知らずただ潜っているのでは。若い二人連れでしょうか。算用数字の8でなくてはいけない、面白い句です。

旅立ちの支度楽しき夏の朝

ゆたか

ただしげさん・・・旅立ちの朝のわくわくした気持ち・高揚感が伝わってくる。

著我咲くを愛づる人逝き今日一年

啓子

敏郎さん・・・「今日は特別」の一句ですね。

紀久男・・・裏山に毎年咲いています。愛でる人のない地味な花です。亡くなられた方はやはり地味な方だったのででしょうか。

啓子（自解）・・・著我の花を愛でた方は短歌を良くなさった方で、その方の庭は樹木も

ありました。山野草で溢れていました。著者が咲くこの時期、姿の良いものを選び根ごと頂いていました。短歌の素材でもあったのです。

雲の峰辻の地蔵はすまし顔 けい子

五郎太さん・入道雲の広がる日、汗をかく自分をよそに、赤い帽子と涎掛けをつけ  
たお地蔵さんはいつもと同じ顔をしている。対比がよく効いています。

天牛さん・すまし顔がいいですね。

眼力も萎えて目を閉ず猛暑かな 天牛

敏郎さん・同じ老年期特有の現象かもしれません・・・

亜也さん・目もショボショボするのはまさに実感で、言い得て妙。

怪しげな夢は中折れ昼寝覚 盛雄

龍平さん・朝と勘違いしてゴミ出し間に合う？とガバリと起きたり、ともかく嫌  
です、昼寝覚めは・・・

二点句 家族の数確かめ枇杷を挽ぎ呉る 恵洲

堂哉さん・お爺さんが、次々に気前良く家族連れに。贈るほうも、貰うほうも、

笑顔いっぱい。

髪結いて七夕迎う妻若し 雅夫

敏郎さん・唯々羨ましき限りです!!

早朝に涼を求めて夫婦連れ 國護

隆さん・故山鹿兒島では、夏の農家は涼しい朝の農作業に励む。土手の草払い、  
昔なら稗取りなど。今や日本の朝は、涼を求める時間帯になった。

核知らぬ少年の夏雲流る 盛雄

隆さん・核兵器廃棄は人類の悲願。地球が亡ぶか、平和が来るか。大人より優  
れた少年少女が必ず現れると信じる。

一点句 釉薬メーカー社長の傘寿祝（名古屋） 紀久男

豪盛に散財尽す夏宴

紀久男

紀久男（自解）・この当日、昼は東邦ガスの今池のホールを貸切にして、新内、清元  
の人間国宝をワキに玄人はだしの芸を披露。名古屋芸妓総揚げで  
鯨（しゃちほこ）踊りなどが演じられ、夜は当地最高の料亭を貸  
切で名妓連の踊りと美酒・美肴。すべてご招待です。今時名古屋  
邦楽界、花柳界のパトロンは大したもの。しかも彼は経済同  
友会の副代表で論客です。小生とは河東節の仲間、丸紅名古屋  
支社長をされた鶴岡元専務、高畑元取締役、など支店長経験者と  
親交。毎朝ヒルトンホテルのジムやプールで身体を鍛えておられ  
ます。

## 【青葉会予定】

令和四年八月二十五日（木）

会場：三軒茶屋 しゃれなあと（世田谷区施設）  
時間：十三時～十六時半

※ご参加をお考えの方で場所が良く判らない方は星田までお問合せ  
8



せ下さい(☎080・8870・8201)。

◇参加者は当季雑詠5句。投句は2句まで。投句締切：八月二十三日(火)中。  
◇ご参加のご意向、投句は今井宛FAXか郵送、或いは星田メール宛お願い致します。



### 青葉会報

一、猛暑中、展示内容総入れ替えした丸紅ギャラリーの、歴史的価値の高い小袖などを鑑賞後に句会出席された方が殆どで8名出席。投句は欧州旅行中のゆたかさんから13名。コロナ禍の中ですが、赤坂飯店の個室2卓にてゆったりと開催。いつもの五郎太さんの進行役でご覧の通り、孤舟さん、とみ子さん、びんさん等が高得点でした。

### 二、関係者近詠

友求む一年生に学校広し	眞希子	藍浴衣着る人が着て艶治なる	陽亮
鯉織インターホンに来意告ぐ	全	円熟に遠き半寿や柿若葉	全
夕つつじ下校のバスの待ち呉れて	全	三杯酔垂らしてひとり冷奴	全
木苺咲く往復七千歩の通勤路	全	出藍の誉れ老いたりシネラリア	全
復活祭戦禍コロナ禍猛る地に	全	先輩の卒寿とダイヤ婚	全
春深し不発弾めく知菌を抜く	弘子	晩春の慶事重なる三世代	紀久男
ころころと風の押し来る古巣かな	全	水温む原発岬に風車増ゆ	全
コーギーのおぼれてしまふ草若葉	全		
歌会の案内下がるリラの花	全		
ふたみたび薔薇の香りの歩を戻す	全		

——「森の座」八月号(横澤放川選)

ふるさとを護る菩提寺月涼し	盛雄	蛍の火共に苦学の友逝けり	健介
シルクロードの果ては大和か星涼し	全	喧(かまびす)し鴉子持ちか木下闇	全
核知らぬ少年の夏雲流る	全	曾我兄弟名こそ残せど木下闇	全
アリバイを残す夜遊び蝸牛	全	江戸城に曲者忍ぶ木下闇	紀久男
片陰の首長美人アガパンサス	全	誘はれし夜振大漁千曲川	全
		舞妓らの下駄音涼し先斗町	全
		投函し坂のベンチに涼みをり	全

——「きさらぎ句会」七月

夏潮の青きうねりよ若き日よ	允章
真昼間の音の消えたる極暑かな	全

### 三、孤舟選者近詠 「爽樹」誌7月号より

形代の流れに澱み神の杜	ひとつづつ峰の暮れゆく夕焼かな
確信の崩れさうなり雲の峰	出番来るまで車屋の片かげり
舟虫の伝令のごと四方に散る	

令和四年八月 十日

紀久男 記